

《正岡子規（36）の続き》その308

天涯茫茫生

佐藤紅緑の続き

紅緑がぐつすり眠っているところを、電報の声に起された。電文に曰く「マサオカナクナツタ」。時刻は七時である。

紅緑はあわただしく急ぎ人力車に乗り、子規庵にいそいだ。座には既に鳴雪、碧梧桐、虚子、左千夫、義郎が来ている。

病室はいつもの如く開け放され、頭を座敷、即ち皆の座っている方に向け身を横たえている。顔にかけた白布がなければ、枕頭の線香の煙がなければ、普段の姿で睡眠している通りである。線香を枕頭に点じ、座に復した。

紅緑の復席と同時に、碧梧桐と左千夫が寺を決めに出かけた。候補の寺の二ヶ所のうち、やはり大龍寺が清潔で、墓地も広いのとやや手狭なのがあるが、狭い四坪半の方としたいが、住持が不在で、午後には居ることとで、今一度行つて決めることとなった。

戒名のことだが、普通は僧侶に決めてもらうのだが、子規が佛教信者でなかったため、周囲の者が勝手に決めたようだ。先ず鳴雪が、癩祭書屋子規居士ではどうかと提案した。虚子は子規が在世時、俳家人名を調べたとき、

戒名の長々しく馬鹿気ているのに驚いたと話していたことを語った。そこで鳴雪はじめ座中が推敲の結果、単に子規居士とすることにした。

戒名について、紅緑は隣家の陸羯南のところに相談に行つた。羯南の説では、なるべく生前の名を用いたいから、癩祭書屋子規としたらどうか、居士という字はあつてもなくてもいい、しかし衆議決したならそれでもいいと特に異論はなかった。

午後になつて鳴雪と碧梧桐は寺に行き、墓地のこと葬儀のことを取りきめて歸つてきた。

迎僧は一人、導師一人、侍僧四人、出棺時刻は二十一日午前九時。

ずいぶん派手というか、賑々しい葬儀だ。子規が求めた葬儀とは、大分異なるようである。今明晩の当番を次のように定めた。

十九日 左千夫、四方太、義郎、秀眞、  
蔵、紅緑

二十日 虚子、碧梧桐、鼠骨、瓢亭、麓やがて棺が来た。寝棺である。長さ五尺、巾二尺三寸、深さ一尺二寸である。一尺は約三〇・三〇センチ。一尺は十寸。子規は身長五尺三寸余であつたから、膝を立てて棺に入れたのであろう。

特に湯灌をせず、顔を清めるにとどめた。それも紅緑がつとめた。鳴雪をまじえて葬列の相談をした。

鳴雪翁先導

白張提灯二対、生花一對

門人等は棺側に侍して行く

位牌は従弟三並 良氏奉持

各分擔は次の如し

寺掛 碧梧桐、浅茅、鉄露、碧童

行列掛 鳴雪、瓢亭

参会者接待 柴人、紅緑

宅の諸務 虚子、左千夫、麓、秀眞

これらが決つて、秀眞は銅板に左の文字を彫刻し、棺の上にのせて埋葬することとした。

子規 正岡常規之墓

慶応三年九月十七日生

明治三十五年九月十九日歿

行年三十六

新聞に広告は出さなかったが、訃報が各新聞紙に出され、多くの人が通夜や葬儀に列し、送葬参会者は百五、六十名に達した。子規庵の東隣二軒目の家を借りて、参会者の休憩所に当てたが、充滿して、庭に立っている者も少なからずあつた。

出棺となつたが、鶯横町はその狭いことで有名であつたから、子規の見通しの如く、見動きもできない。